

研究課題	「甘え」のアンビヴァレンスと心理療法に関する 関係発達臨床からの検討
研究代表者	小林隆児（臨床心理学科 教授）

① 研究の目的

心理臨床の世界において、人間のこころを理解するという営みは、その国独自の文化的背景を抜きには考えられない。日本人であれば暗黙のうちに日本文化を身に纏い、自ずから日本語を用いて対人関係を営んでいる。このことは改めて取り上げるまでもなく、至極当然のことであるはずだが、実際の臨床においては未だに西欧で生まれた様々な心理療法の技法が輸入され、試用されていることが多い。

わが国固有の文化の中で生まれた「甘え」を鍵概念として、精神（心理）療法の世界に独自の領域を開拓した土居健郎の「甘え」理論は、日本人のこころとその病理現象を理解する上で今日においてもその独自性と重要性は色褪せていない。しかし、「甘え」という現象が現実には負の意味合いを伴って受け止められやすく、「甘え」理論に対する批判的論調も少なくない。

申請者（以下、筆者）は平成21年度の本学術研究助成を受け「自閉症における愛着形成促進がこころの発達に及ぼす影響に関する臨床研究」を行った。具体的には、乳幼児期の自閉症スペクトラム障害の事例を対象に、「関係発達臨床」の立場から愛着形成の問題が子どものこころの育ちの過程に与える影響について検討した。そこで治療を考える上でもっとも重要と思われたのは、子どもの養育者への「甘え」のアンビヴァレンスであった。このことが母子関係の負の循環をもたらし、それを基盤にした両者の関わり合いが蓄積していく中で、子どもに多様な症状や障害が生まれてくるということである。このことは、けっして子どもにのみ該当する知見ではなく、思春期から大人においても、さらには発達障害のみならずあらゆる精神病理に対する理解と治療を考える上でも重要な知見となることを主張した。なぜなら、「甘え」のアンビヴァレンスは、＜子ども—養育者＞関係という原初段階の人間関係の問題として深く息づいているため、その後の精神発達過程で様々な側面に影響を及ぼすことが考えられるからである。

以上の成果を踏まえ今回の研究では、発達障害のみならず、あらゆる年齢段階とあらゆる精神病理現象を示す患者群に今回の知見を応用することによって、新たな心理療法に関する知見を集積していくことを目的とした。その際、土居の「甘え」理論による心理療法に対して、乳幼児期の臨床知見をもとに、再照射を試みることによって、今回の研究がさらに発展していく可能性が高いと考えられた。

② 研究の経過

本研究に入る前に筆者は、土居（2009）が著書『臨床精神医学の方法』（岩崎学術出版社）の中で論じたメタファーと精神（心理）療法との関係について、関係発達臨床の立場からその意味を再検証し、以下のことを論じた（小林, 2010）。すなわち、関係発達臨床では、幼児期の養育者との「甘え」をめぐる病理である「アンビヴァレンス」の特徴を捉え、それをいかにして緩和するかを治療の焦点に当てているが、それは原初的知覚優位な原初的コミュニケーション世界のことであるゆえ、メタファーと精神療法に関する問題とも通底することを示した。

さらにこの論文を発展させたものとして、わが国独自の文化の中で生まれた「勘」ということばを鍵概念として用いて統合失調症にみられる妄想について土居（1986）が論じた「勘と勘繰りと妄想」論文について、再照射を試みた（小林, 2011）。そこで以下のことを明らかにした。すなわち、「勘」と「勘繰り」は原初的知覚に基づく体験とみなすことも可能で、このような視点を持つことによって、統合失調症の「妄想」の成り立ちにおける原初的知覚の果たす役割が明らかになる。「原初的知覚」という鍵概念を用いることを通して、知覚、情動という生物学的次元に近い現象と「甘え」にまつわる種々の精神病理現象の関連を統合的に理解する道が切り拓かれるのではないかということである。

以上の研究から、明らかにしてきたことは、「甘え」のアンビヴァレンスは乳幼児期から成人期の生涯発達

過程のいかなるライフ・ステージにおいても、潜在的にあるいは顕在的に捉えることができ、それに焦点を当てることによって心理療法の道が切り拓かれることを示し、「甘え」のアンビヴァレンスの治療的意義を再確認したことであった。とりわけ、心理療法において「甘え」にまつわる現象を捉えることを可能にしているのは原初的知覚としての“vitality affects”（力動感）であることを指摘し、「甘え」と“vitality affects”の近似性についても言及した。

③ 研究の成果

今回の研究成果は次の二つの段階に及ぶ。

第一には、以上のごとく、「甘え」理論の独創性とその意義を再認識した筆者であるが、その一方でこれまで「甘え」理論は誕生した当初から、多くの批判や誤解を生んできたことも事実であった。そこで筆者は、「甘え」理論がなぜ批判や誤解を生みやすいのか、その問題の所在を少しでも明らかにし、「甘え」理論が人間の生涯発達過程における精神病理と心理療法を深める上で、今なお重要性を失っていないことを論じた。その際、「甘え」と Stern 理論の鍵概念のひとつである“vitality affects”との類似性に再度着目することで、これまでの「甘え」理論に対する批判や誤解を乗り越えることができるのではないかと思われたからである。本論の主張は精神分析療法の技法の柱である転移と解釈に深く繋がっていると考えた。

以上の研究成果に引き続き、筆者が心理療法を実施した乳幼児から成人までの多様なライフステージでの患者（クライアント）を対象に、実際の面接過程で「甘え」のアンビヴァレンスがどのような形で顕在化するかを示し、それを面接場面で直接取り上げることが心理療法の重要な契機となるとともに、治療転移としても重要な役割を果たす可能性があることを明らかにしたいと考えて実施したのが、次に述べる第二の成果である。

研究対象としたのは、筆者がこれまで乳幼児から成人まで幅広い領域の患者の心理臨床に従事し、治療的関与をもった事例である。対象は乳幼児期、学童期、前思春期、思春期・青年期、成人期など多様なライフステージに及び、かつ臨床診断も発達障碍圏、精神病圏、神経症圏など多岐に及んだ。そこで用いた研究方法は、①面接過程で「甘え」のアンビヴァレンスがどのような形で表れるかを、具体的な面接場面をエピソード記述でもって明らかにすること、②そのアンビヴァレンスを面接でどのように扱ったかを示し、その

ことによって面接過程がどのように変化していったかを取り上げることであった。そこで得た成果は次のとおりである。

1) 面接におけるアンビヴァレンスの表れは、乳幼児では母子関係の中で明瞭な行動として示されていたが、その後アンビヴァレンスは次第に内在化して個人内の病理として、面接者との間で微妙なかたちで表現されるようになっていく。しかし、いかなる病理を示していようと、アンビヴァレンスは多様な表現型で示されていること。

2) アンビヴァレンスが生み出される背景には、事例固有な家族内の様々な事情が関与していることを示すとともに、アンビヴァレンスの把握と具体的な理解のためには、患者の歴史的背景を丁寧にみていくことが不可欠であること。

3) 面接においてアンビヴァレンスを具体的に把握するためには、「甘え」にまつわる心の動きを感じ取ることが重要であるが、それを可能にしているのは原初的知覚であること。

4) 「甘え」理論が誤解や批判を生みやすいのは、主として現象としての屈折した「甘え」のみを取り上げることによるが、「甘え」は乳幼児期早期の原初段階の対人関係の成立をめぐる問題であることから、表面に現れる屈折した「甘え」のみに注目するのではなく、「甘え」が絡む対人関係の原初段階での反応様式が成長後に微妙な形の対人反応で顕在化することに着目することが必要であること。

5) 以上、各事例において、アンビヴァレンスが面接過程でどのような表現型を取るかを示したが、それらは「いま、ここで」アクチュアルに把握する必要があることを強調した。

6) 面接過程でアンビヴァレンスの現われを「いま、ここで」取り上げることによって、患者あるいはその家族の理解は急速に深まり、その後の劇的な変化へと繋がっていることを示した。

7) 心理療法の面接過程でこのような変化がなぜ起こるのかを考察し、次のことを論じた。すなわち、治療者が患者のアンビヴァレンスを見て取る際には、原初的知覚である力動感 vitality affects の果たす役割が大きいことが、そのことにより、＜患者－治療者＞間に情動水準の関係が成立し、それは共感関係ともいえるものであると考えられた。そして、治療者がそのアンビヴァレンスを取り上げ、言語化する過程こそ精神分析療法でいうところの転移と解釈にあたることを述べた。

以上の結果から、いかなるライフステージの、多彩

な精神病理を示している、患者のアンビヴァレンスに焦点を当てて心理療法を実践していくことが、心理療法的意義を高めることになるのではないかと論じた。

以上の研究成果は、ひとつにはすでに「精神分析研究」において受理されたが（小林、印刷中）、さらに全体の成果を単著にて近々報告すべく準備中である（小林、執筆中 a）。

④ 研究の課題と発展

本研究を踏まえ、今後の課題は心理療法において「関係」を見ることの意義と具体的な技法論上の課題について、さらに具体性をもった心理療法技法を提起したいと考えている（小林、執筆中 b）。

文献

- 土居健郎（1971）。「甘え」の構造。弘文堂。
- 土居健郎（1986）勘と勘繰りと妄想。（高橋俊彦編）
分裂病の精神病理 15。東京大学出版会，pp.1-19。
- 土居健郎（2009）臨床精神医学の方法。岩崎学術出版社。
- 小林隆児（2008）よくわかる自閉症。法研。
- 小林隆児（2010a）。自閉症のころをみつめる。岩崎学術出版社，東京。
- 小林隆児（2010b）関係からみた発達障碍。金剛出版。
- 小林隆児（2010c）メタファーと精神療法。精神療法，
36（4）；517-526。
- 小林隆児（2011）。関係からみた「勘と勘繰りと妄想」（土居健郎）。精神療法，37（3）；327-336。
- 小林隆児（印刷中）。「甘え」（土居）と“vitality affects”（Stern）－「甘え」理論はなぜ批判や誤解を生みやすいか。精神分析研究。
- 小林隆児（執筆中 a）。関係からみた「甘え」と心理療法（仮題）。
- 小林隆児（執筆中 b）。関係をみれば関係は変わる（仮題）。
- Stern, D. (1985) The interpersonal world of the infant. New York, Basic Books. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳、神庭靖子・神庭重信訳（1989, 1991）。乳児の対人世界 理論編 / 臨床編。岩崎学術出版社。
- Stern, D. (2010) . Forms of vitality. London, Oxford University Press.
- Werner, H. (1948) Comparative psychology of mental development. New York, International

University Press. 鯨岡 峻・浜田寿美男訳（1976）。
発達心理学入門。ミネルヴァ書房。